

クラーク室内管弦楽団 第38回演奏会

“フレッシュマンを迎えて 2016”

2016年4月22日(金) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館 講堂

入場無料

プログラム

W. A. モーツァルト (1756-1791)

歌劇「魔笛」序曲 K. 620

C. A. ニールセン (1865-1931)

演奏会用序曲「ヘリオス」Op. 17

A. L. ドボルザーク (1841-1904)

交響曲第8番ト長調 Op. 88

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-2502 (農学研究院 曾根輝雄)

プログラム・ノート

作曲家と「科学者」。16世紀のヨーロッパで両者の共通点は何だったのでしょうか。キリスト教（ユダヤ教やイスラム教でも）の世界観の中で仕事をしていた彼らは、神様の作った世界の仕組みを明らかにするというのが彼らの根本的な仕事の理由でした。科学の世界に関してはニュートンもあるいは19世紀の科学者も多くは、そのような問題意識（知識人の使命感）が研究動機のおおもとにあったようです（個人的な知的好奇心は名誉欲ももちろんあったでしょうが、いわゆる「飯のため」科学研究に従事する現代的な職業科学者は、19世紀まではまだ一般的ではありませんでした）。また、作曲家や詩人も宇宙に満ちている神様の声を聞き取って、現世の普通の人間でも聞くことのできる具体的な形にするのが仕事でした。モーツァルトの同時代の作曲家たちの多くは、教会や貴族に雇われ雇い主の要求に応じる形で作曲の仕事をしていましたが、それでも作曲という行為は「天の声」を聞き取りそれを音符にすることという考え方が一般的だったようです。この時代はいわゆる現代的な意味での「聴衆」はおらず、雇い主以外の聴き手に喜んでもらおうという意識は多くの作曲家には希薄だったようです。また、聴衆も（とくに貴族の社交場としての演奏会では）音楽の内容に何かを期待するわけではなく、演奏は一種のBGMで、その場での飲み食いやおしゃべりがコンサートの主な目的でした。

そのような中で、モーツァルトは幼い頃から実地で場数を踏み、どのようにすれば聴衆が喜ぶかを現場で肌で学びながら作曲家として成長していきました。二十歳を過ぎ、ザルツブルクを飛び出して（定職の地位を捨てて）ウィーンに出て行ったモーツァルトが、大変な売れっ子になったのも当時のウィーンの聴衆を喜ばせる技を持っていたことが大きな原因であると考えられます。しかし、モーツァルトは徐々に、貴族を喜ばせることに飽き足らず、自分の書きたい音楽を書き始めます。その結果、ウィーンの聴衆たちはだんだんとモーツァルトのもとを離れていくことになるのです。ところが、最晩年、モーツァルトは再び、多くの人々に長く愛される曲を書き始めます。最後の歌劇『魔笛』は、ドイツ語で書かれ（それまで歌劇はイタリア語で書かれ歌われるのが常識）、ウィーンの一般大衆に喜んでもらえる作品を目指したものでした。フランス革命以降、貴族社会・身分社会が崩れていく中で、市民のための音楽がヨーロッパでは育っていきますが、魔笛はその先駆けの作品と位置づけることができるでしょう。

一方、19世紀半ばには、ヨーロッパの中でもその地域色を意識した、いわゆる民族主義的な要素の強い作曲家が出てきます。ドヴォルザークはチェコの民族主義を代表する作曲家の1人といえるでしょう。その音楽は、ほぼ同世代でドイツロマン派の大御所ブラームスなどと比べると、特徴・雰囲気が大きく異なります。**交響曲第8番ト長調**はドヴォルザークがアメリカに招かれる前に作曲され、音楽的な完成度とチェコらしさ（アメリカ風が入っていない）がもっともよく現れている交響曲かもしれません。どこか垢抜けない（失礼！）朴訥とした雰囲気は、北海道の風土にもよくあっています。（かつてこの交響曲は「イギリス」と呼ばれていましたが、それは楽譜がイギリスの出版社から出版されたからで、音楽的にはイギリスとは関係なさそうです）。

ニールセンは、19世紀後半から20世紀前半にかけて活躍したデンマークの作曲家ですが、北欧の民族的色彩が強くない作品も多いようです。この時代には、いわゆる描写音楽と呼ばれるタイプの管弦楽曲が作られるようになってきますが、この**演奏会用序曲『ヘリオス』**も、ニールセンがギリシャを旅行した時にエーゲ海から登る太陽を見てインスピレーションを得たといわれています。日が昇ることから日が沈むところまでを音楽で表しているわけですが、太陽神ヘリオスの名が付いているとおり、ヨーロッパの文化圏ではギリシャ神話の神様がいたるところに隠れています。4頭立ての馬車を率いて天を駆ける太陽神のイメージもこの曲の中間部分には込められているようです。ちなみに、元素「ヘリウム」の名前もこのギリシャの太陽神からきています。やはり、現代でも音楽と科学には密接な関係が…？